WSF Japan 創立10周年を迎えて

代表　三ッ谷　洋子

WSFジャパンができて、はや10年目を迎えました。ひと昔前には考えられなかったほど、女性とスポーツのかかわりは広がっています。しかし、その分だけ問題も増えました。WSFジャパンの役割は益々大きくなっています。

●私たちの活動のスタートは

「女性スポーツの振興には横の連携が不可欠」と考え、「第1回国際女性スポーツ会議」を開催したのは、11年前の10月9日のことでした。覚えている方もいらっしゃるかも知れませんが、この会議は種目の異なる内外のトップスポーツウーマンをパネリストに招待して開いたもので、日本ではスポーツ選手（元選手）を集めての初のシンポジウムとしても、注目されました。パネリストはつぎの7人でした。

・ベラ・チャスラフスカ（体操＝チェコ）
・エベリン・アシュフォード（陸上＝米国）
・デリア・トシコ（マラソン＝米国）
・ダイアナ・ナイアド（遠泳＝米国）
・アンネマリー・モザー・プレル（スキー＝オーストリア）
・バージニア・ウエード（テニス＝イギリス）
・今井通子（登山＝日本）

この7人は種目や国籍の違いこそありますが、スポーツを通して得た素晴らしい経験や、それに至るまでの苦労、女性だからこそ抱えている問題などを、それぞれ語ってくれました。当日は、日比谷のプレスセンターホールに入りきれないほどの入場者がつめかけ、イベントとしては大成功という評価をいただきました。

私がこの会議を企画した目的は、スポーツにかかわっている女性たちのネットワークを作ることでした。そして一年後、皆さんの協力でこのWSFジャパンが設立されたのです。

●問題提起に力点を置いた10年

この10年間、私が機会あるごとに訴えてきたのは「なぜスポーツを〝女性〟というくくりで考える必要があるのか」ということでした。「スポーツをするのに男女を分けるのはおかしい」と反論する人が多いからです。スポーツを楽しむのに男女の違いはあろうはずがありません。私がいいたいのは、女性の身体的条件や社会環境、文化的背景がスポーツに関する限り、男性よりもハンディになっているということなのです。そのハンディを少しでも軽くすることが、真の女性スポーツ振興なのです。

WSFジャパンはこれまで、スポーツにかかわる女性たちが抱える多くの問題を掘り起こしてきました。セミナーや勉強会、このWSFジャパン・ニュースを通じて、その問題を提起してきました。〝スポーツ界の総本山〟と呼ばれる日本体育協会や、オリンピック選手の育成に取り組むJOC（日本オリンピック委員会）に女性理事を送り込もうという現在の活動は、問題を私たちの手で直接、解決していこうという運動の一つです。

ただ、こうした活動は一般の人たちには解りにくく、また地味であることから、賛同者を増やして組織拡大につなげるには、もう少し時間がかかりそうです。

●目を見張る女性種目の広がり

それでも、この10年で女性スポーツの様相はガラリと変わりました。これまで〝男性スポーツ〟と思われていたマラソン、柔道、レスリング、重量あげ、サッカー、ラグビーなどに、次々と女性たちが進出しています。日本の場合、〝外圧〟が多分にその後押しをしていることは、他の分野と同じです。女性スポーツにおける〝外圧〟とは、欧米で先に盛んになって女子の世界選手権が開催され、日本の各競技団体があわてて女子選手の強化に取り組むという構図です。柔道、レスリング、重量あげなどが、これに入ります。

また、世界との隔差が大きい男子より、女子の方がメダルのチャンスがあるといって、男子を見限って（？）女子の指導に積極的に乗り出す男性指導者も出てきました。サッカーや水球です。このほか、オリンピックでは新体操やシンクロナイズド・スイミングが、男子に先駆けて正式種目に入りました。これは多分に、テレビ向けの配慮だと、私は解釈しています。

●実を結び始めた活動

このような女性スポーツの広がりと併行して、WSFジャパンの活動も少しずつ評価され、実を結ぶようになってきました。設立5年目に始まった「女性スポーツ京都会議」（京都新聞社主催、WSFジャパン協力）は、今年

で6回目を迎えました。毎回、テーマの設定、講師の選定や交渉、パネルディスカッションのコーディネーターなどの仕事を引き受けていますが、京都の方々にはお馴染みのイベントとして定着しました。今年（3月29日開催）も二百人以上の女性たちが参加し、とても盛り上がりました。

昨年の北京アジア大会では、日本選手団では初めて、女性の役員が誕生しました。JOC評議員の小野清子さんが競技担当役員に選ばれたのです。WSFジャパンでは一昨年7月に体協とJOCに女性役員登用の第1回要望書を提出しましたが、これもその成果の一つといえます。小野さんは参議院議員という忙しい身でありながら、女子選手のお母さん役を立派に果たして来られました。アジア大会やオリンピックといった国際大会では、女子選手は身体的なトラブルも含め男性指導者には相談できない悩みにぶつかることが少なくありません。そんな意味で、オリンピック選手の経験もある小野さんの存在は、若い女子選手たちに大きな安心感を与えたのではないかと思います。銀メダルを取った全日本女子サッカーチームは、スタンドで声援を送る小野さんにとても励まされたと話していました。

●女性なくして語れない時代

そして10年目の今年は、文部省等が主催する「生涯スポーツコンベンション」（2月5日）の分科会で、女性スポーツが取り上げられました。このコンベンションは昨年に続き2回目です。第1回では入っていなかった女性スポーツが今回、5つの分科会の1つに選ばれたキッカケは、社団法人全国体育指導委員連合の発言でした。事前の企画会議で、同連合の代表で出席した方が「地域のスポーツ活動に携わっている体育指導委員の18%、約一万人が女性。しかも、資格を取る女性が年々増え、男性は頭打ち」と現状を説明し「女性スポーツをぜひ取り上げていただきたい」と提案したのです。

この分科会は「施設利用」「指導者」「マリン、スカイ・スポーツ」「企業とスポーツ」と並んで実施され、私は助言者として出席する機会を得ました。医学的側面からの問題や、組織作りの問題など内容は多岐にわたりまとまりはありませんでしたが、女性スポーツをめぐる問題は、これだけ多様だということが、スポーツ行政を担う主催団体や参加者に気づいてもらえれば、第一歩として成功だと考えています。

静かな池に投げた小石の波紋をさらに広げるための活動を、これからも、皆さんと共に続けていきたいと思います。